水無瀬離宮（水無瀬殿）の都市構造を探る

ー新御所（上御所）と山上御所推定地周辺を中心にー

国際日本文化研究センター　客員教授

豊田　裕章

はじめに

本日のシンポジウムでは、「水無瀬離宮の都市構造を探る」ということでお話をさせていただくことになっていますが、時間が30分と短いので、水無瀬離宮の都市的構造も含めた概要については簡潔に述べて、現在話題となっている新御所（上御所）周辺を中心にお話させていただきます。

1　水無瀬離宮の概要

水無瀬殿（水無瀬離宮）は、後鳥羽上皇の近臣であり内大臣であった源通親（みなもとのみちちか）の山庄（山荘）を離宮とした第1期（正治2年1200～元久2年1205）、寝殿の改修や上皇の御願寺である蓮華寿院が建立された第2期（元久2年1205～建保4年1216）、新御所や山上御所が造営された第3期（建保5年1217～承久3年1221）と次第に拡充されたと考える。

その盛期である第3期の水無瀬殿は、本御所新御所（上御所）、南御所（薗殿）などの複数の御所群や小御所（こごしょ）、馬場殿（ばばどの）、長廊（ながろう）などの附属施設から構成される中核区域を有していた。この中核区域には本御所を中心とする街区A、新御所造営にともなってさらに整備されたとみられる街区Bが設けられていたと推定する。本御所と新御所を東西につなぐ街路が、馬場としても用いられたと考えられ、馬場殿や長舎状建物である長廊はその南側に存在したと推定する。

この中核区域の外部の山側に、これも水無瀬殿を構成する御所の一つである山上御所が造営された。これらの御所群は水無瀬殿と総称され、これに属するそれぞれの御所は、正式には水無瀬殿本御所、水無瀬殿新御所（上御所）、水無瀬殿山上御所のように「水無瀬殿」を冠して呼ばれた。

また、この水無瀬には、六条宮雅成親王の御所、上皇の御願寺（ごがんじ）で等身の阿弥陀如来像と千体の地蔵菩薩像が置かれた蓮華寿院、源通親の泉の湧く宿所である内府泉、後鳥羽上皇の乳母である藤原兼子（高倉兼子）、前太政大臣藤原頼実（大炊御門頼実）、藤原公経（西園寺公経）、藤原光親（葉室光親）、藤

原保家（持明院保家）、尊長僧都のような上皇の有力近臣の宿所も設けられていたと考えられる。

ただし摂関家の藤原道家（九条道家）や藤原家実（近衛家実）も自前の宿所は所有していなかったようである。水無瀬殿に自前の宿所を所有しているのは、上皇との関係の濃厚な近臣であったようである。藤原定家は近臣であるけれども、その中では疎遠な立場にあり、水無瀬川左岸の山崎という水無瀬川を隔てた場所に、油売小屋、播磨大路小屋、衆生寺僧坊などを借りて宿所としている。

水無瀬殿は、直接的に附随する広瀬とも呼ばれる水無瀬の地域だけでなく、水無瀬川左岸の井内、桜井も含めた広大な附随地に関連施設を展開するものであった。後鳥羽上皇は、水無瀬殿の御所群内部の庭園だけでなく、附随地も含めた一帯のすぐれた景観をつなぎ合わせ、シークエンスデザインのように水無瀬という地域を広大な庭園として機能させていたのではないかということも旧稿で述べた。

水無瀬殿は、周知のように今様や白拍子合（しらびょうしあわせ）、蹴鞠（けまり）、隠遊、水泳などの遊興、水無瀬殿恋十五首歌合のような歌合や連歌会などの文芸、笠懸（かさがけ）・競馬（くらべうま）・狩猟・小弓などの武芸、さらには修法が行われる場であった。ただし、水無瀬殿を中心とする水無瀬の地域は、伝聞記事ではあるが『明月記』の魚市の移設の記載

図1　水無瀬離宮と附随地の推定図

（昭和22年アメリカ軍撮影による国土地理院所蔵の空中写真に加筆、豊田2022より）

にうかがわれるように経済的な拠点としての機能や、上皇の片野（交野）などへの御幸の拠点、承久の兵乱で軍勢が配備されたことに見られる軍事的拠点としての機能も有していたと考えられる。

後鳥羽上皇が水無瀬殿に滞在中も、ここで政治上の実務的な裁断を行い、これを京の朝廷に伝達して実施させていた。このように水無瀬殿は政務運営の場としての機能を有していた。

この水無瀬殿の選地設計思想として、伝統的な四神相応思想とともに、北宋時代以後に勃興した地勢を重視する形派的風水思想や、淀川対岸に鎮座する第二の宗廟として当時崇敬されていた石清水八幡宮への信仰などが重層的に意識されていると考える。

図2　水無瀬殿中枢区域の推定図（豊田2016より）

※　本資料で、水無瀬離宮の中核区域の「街区」の「街」は「道路」の意味で、そして「街区」は街（道路）によって区切られた空間の意味で用いている。それによって区切られた空間の内部は、人々が凝集して居住している空間であるとは限らない。その内部は切り芝や灌木の生えたような空間であった場合も考えられる。

2　水無瀬離宮（水無瀬殿）の関連施設

（1）　新御所（上御所）と南御所（薗殿）

A, 文献史料から

①水無瀬殿本御所が建保（けんぽう）四年（1216）の大洪水で「顛倒流出（てんどうりゅうしゅつ）」したため、他所を選び定めて「水無瀬殿新御所」が造営された（『百練抄』）。　※『仁和寺日次記（にんなじひなみき）』では「上御所」と記す。

②この造営にともなって同年十二月二十九日より建保五年（1217）の年初にかけての七日間、御所新築に際してその御所の安穏を祈るための秘法である安鎮法が、延暦寺座主である承円などにより新御所の造営現場で行われた。

③建保五年正月十日に、新御所の完成を祝して移転の儀式である移徙（いし）の儀式が行われた。

④翌日の正月十一日にはこの新御所と考えられる寝殿の南の弘廂（ひろびさし）で、公卿によって御遊始（ぎょゆうはじめ）が行われた。

※　萬歳楽、五常楽、賀殿などが演奏され、また催馬楽（さいばら）の青柳（あおやぎ）、美作（みまさか）が歌われている。

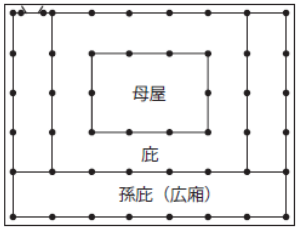

図3　新御所寝殿の平面構造推定復元図（豊田 2016 より）

⑤この時の安鎮法に関する『阿娑縛抄』の「水無瀬殿安鎮日記」の記載や指図により、新御所の寝殿の構造を、母屋が桁行3間、梁行2間で、四面に庇がめぐり、北・西・東面にはさらに孫庇（弘庇、広廂）が設けられていたものと推定した。

⑥『阿娑縛抄』の記載やもう一つの指図からは、水無瀬殿新御所（上御所）の周囲が「築垣」で囲まれていたこととともに、そこに開かれた門の位置、御車宿の位置、南側に南御所（薗殿）という別区画が存在したことがわかる。 ※ここでの築垣は、築地の上に屋根として板を並べ、土を載せたものであると考える。

⑦新御所の西側には平門（平唐門か）がある。東門の内部には御車宿があったことから、東側の門が正門で四脚門という構造の門であると考える。『阿娑縛抄』の指図では、北側の築垣には、西と東に二つの門が点で示されている。前者は点二つ、後者は点一つで「小門」と記されていることから、前者は棟門、後者を棟門の小型の門と解した。

⑧新御所の玄関にあたる中門や中門廊なども必然的に正門のある東側にあったと考えられる。

⑨御所の南側には、南御所（薗殿）と呼ばれる別区画の御所があった。南御所（薗殿）も築垣を設けたものであった。薗という地名から花園や菜園などが存在した可能性がある。南御所には、おそらく北よりに建物があったと考えられる。

図４ 新御所と南御所の平面配置推定概念図（豊田2016より）

⑩『阿娑縛抄』の指図や本文には、安鎮法を行うための九つの仮屋（その中に穴も掘られている）が書かれている。その位置を概念的に示したものが図 5 である。なお、「輪供養等事不見之」（輪供養等事これを見ず）と記されており、これを輪宝のことと解すれば単に記述者が見なかっただけである可能性は否定できないものの、輪宝は埋められていない可能性もある。

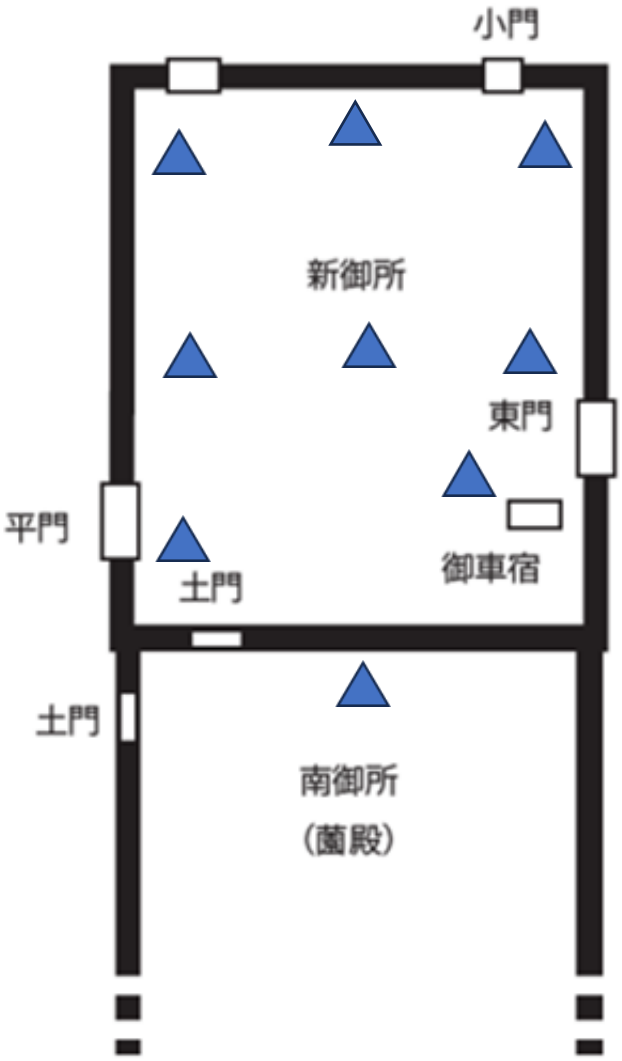

図５　新御所と南御所の平面配置推定概念図（豊田2016より）
に九穴と仮屋の位置を▲で概念的に示したもの

⑪『阿娑縛抄』を翻刻したものとしては、『大正新修大蔵経』と『大日本佛教全書』がある。両書の指図には異なる点がある。後者で新御所（上御所）と南御所の間は築垣で画されているが、前者では、その間に路が描かれている。それぞれが依拠した写本の違いによると考えられる。本文と照合すると後者を支持したいが、前者の可能性も否定できない。今後さらに検討したい。

⑫『大日本史料』承久元年 8 月 16 日の条所収の『普賢延命御修法記』には、承久元年（1219）9 月 8 日（～9 月 15 日結願）に、水無瀬離宮（水無瀬殿）の付属建物である広御所（弘御所）で、信西入道の孫で醍醐寺座主、東寺三長者などを歴任した前権僧正の成賢などによって普賢延命法が行われたことが記される。上皇も広御所に出御している。同記には、修法の場となった広御所の指図がある。修法の行われた年代が新御所（上御所）造営以後の時期（第3期）に当たることから、この広御所は、新御所（上御所）に建てられたものである可能性が高いと考えられる（ただし、本御所が洪水で被害を受けた後に再建をされていた場合、その建物である可能性もある）。なお、広御所は一つの殿舎である。

『普賢延命御修法記』に記された広御所について、修法の次第を記した本文と照合すると、これは南

北棟建物であると考える。指図では北側と考えられる部分に広庇があり、桁行（ここでは南北）5間、梁行（ここでは東西）2間の母屋が描かれている。指図では西側と考える部分に庇があったことが描かれているが、東側、南側にも庇があった可能性がある。これが北側築垣の棟門と相対する位置にあるものであるならば、新御所の敷地内の北西に存在した可能性も考えられる。

⑬この広御所の記事を新御所（上御所）のものと考えた場合、広御所の推定される桁行が 6～7 間であることから南北距離は約 15mから約 20mであると考えられる。また先述した寝殿の梁行は 5 間であることから、その南北距離は約 15mと考えられる。そのように考えると、寝殿の南端は、北築垣から約 30mから約 35m＋αの位置にあると推定される。

B, 現地に落とし込むと

① 地元には、旧関西電力水無瀬住宅（以下において旧関西電力社宅とする）の辺りに「上御所」があったという（水無瀬神宮は「下御所」の跡という）伝承がある。

② 天坊幸彦「郷土史より見たる水無瀬神宮」（『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書 第十一輯 水無瀬神宮文書』、大阪府、1940年）には、「この宮地は百山の麓即ち・・・東大寺の南に接する字国木原と金井戸の部分であって、・・・（略）・・・東海道線によりて斜めに切断されてはゐる、北側と東側とには帯状の田をめぐらし、この田を称して堀田といひ、堀田の内側には、田に沿うて土手があった・・・（略）・・・この国木原土手上に新御所址の標石が建てられてあった。しかし日本紡績会社の病院が建設されて面目が一変し、土手は全く其影をなくした。」（図 6 写真参照）

※なお、天坊氏は新御所（上御所）と山上御所を区別されていない。

図 6 天坊幸彦「郷土史より見たる水無瀬神宮」（『水無瀬神宮文書』大阪府 1940）より

③ 石碑が建てられていた「土手」について、天坊氏は土塁状の地形のことと認識されていると考えられ、それは築垣の痕跡である可能性が高い。

④ この付近の石碑が建てられていたという「土手」が、石碑が建てられていた部分を残して削られてしまったと考えれば、古写真に見られる台座状の部分は、「土手」の削り残されたものである可能性がある。大正時代に建てられた「水無瀬宮跡」の石碑が、現在は旧関西電力社宅の東北外にある広瀬自治会百山駐車場の西北隅に立てられている。

しかし、『水無瀬神宮文書』の写真のような古写真と現在の位置とは異なり、場所が移されている可能

性が考えられる。

石碑の旧位置については、古写真や奈良国立文化財研究所が昭和 30 年代に測量された手書き実測原図などから、現在の駐車場の中央やや西より辺りと推定する。そうであれば、これらのことからこの石碑の旧位置は、北側の築垣の一部である可能性が考えられる。そのように考えると、石碑の旧位置には新御所（上御所）北側の築垣のラインが通っていた可能性が考えられる。

なお、石碑の台座が堤を削り残したものではない可能性もあり、その場合は必ずしも石碑の旧位置が築垣のラインとは重ならないことも考えられる。ただし、島本町所蔵の明治時代のものと考えられる古図（図 7）や本レジメには載せなかったが、法務局所蔵の和紙公図に見られる極めて細長い地割りは、天坊氏が『水無瀬神宮文書』に書かれたような「堤」状の地割りがある、その北側にあるものは、おおよそ石碑旧位置のラインあたりに相当するのではないかと考えられる。

⑤　このような「土手」については、井上正雄『大阪府全志』（大正11年）でも言及されている。同書によると、「西方百山の麓なる字国木原なるべし…（略）…鉄道線路の東西に跨がりて…西・南・北の三面に濠池の址を存す。同鉄道の開通以前までは濠池の両堤完全に近き旧形を存せしも、其の堤防の土を採りて線路の敷地築立に用ひしかば、今は僅少の旧形を残すのみとなりて、他の多くは田圃 となれり…（略）…鉄道線路の築立の為め濠池の両堤のみならず、附近田圃 も其の築立用に土を採られて旧形を失ひしもの多しといへども…（略）…濠池は後鳥羽院の離宮を設け給ひし時に掘りしものなるべし」とある。

⇒ 『大阪府全志』で、 鉄道敷設以前に存在したとされる「堤」は、天坊氏が書かれているものと同様のもので、築垣の痕跡である可能性が考えられる。

⇒大正 11 年当時でさえすでに田地となっていた「濠池」と記されるものの中には、地割りなどから見て堀、或いは溝などとしての可能性の考えられるものもある。

⇒ただし、その中には、新御所の築垣の外の道路の痕跡ではないかと考えられるものもある。

⑥ このような地誌類の記載や地籍図から築垣の痕跡と推定する地割りや、薗殿と関わると考えられる「園」という地名を若山神社所蔵の江戸時代の天保年間の絵図などから考えると、新御所（上御所）南御所（薗殿）は、旧関西電力社宅に該当し、南御所はおそらく積水イノベーションセンターの辺りではないかと考えられる。なお、南御所の建物は、旧関西電力社宅敷地内の南側ぐらいにあり、それより南の積水イノベーションセンターの辺りは花園などの薗であった可能性が考えられる。

⑦ 新御所（南御所）の正門である東側の四脚門や玄関に相当する中門は、東側に推定する馬場としても用いられた街路の延長ライン上にあったのではないかと推定する。

⑧ 新御所（上御所）推定地である旧関西電力社宅の北側には、道路をはさんで東西に 100mほどの農地がある（図⑧）。この農地と先述した「水無瀬宮跡」の石碑の旧位置から推定する新御所（上御所）北築垣のラインとは、約 10m離れている。島本町所蔵の古図と法務局の和紙公図では、旧関電社宅の場所に大日本紡織の青葉荘が建設に際し水路の位置が改変されているためわかりにくいが、「堤」状の部分と隣接する東西方向の地割りがあり、これが現在の道路の下に埋まっていると推定する。その場合、これが堀田の一つで、築垣の痕跡である「堤」の前のやや大きい溝と犬行の跡であるのはないかと考えられる。今後、考古学的な調査がなされる場合は注視したい。

図 7　新御所の築垣痕跡推定図（明治時代のものと考えられる島本町古図をトレースして加筆したもの、豊田 2016 より）

図 8　水無瀬殿新御所（上御所）・南御所跡・山上御所跡推定地及び周辺の実測図
（昭和 30 年代に奈良文化財研究所が実測された図に加筆して豊田 2016 に掲載したものより）

（2） 水無瀬殿山上御所（みなせどののやまのうえのごしょ）

①第三期の建保五年（1217）に水無瀬殿の「山上」に「新御所」が造営されたということが、『明月記』 同年二月の記事に見える。

②この『明月記』の記載については、従来の研究では建保五年（1217）に移徙のあった第3期の水無瀬殿の新御所と同一のものとされ百山の上に造営されていたと見るような見解もあったと管見する。

③それでは、先述したような『阿娑縛抄』の記載から考証した、平地に立地し四周を築垣で囲まれた新御所（上御所）の構造とは合わない。また昭和三十年代に奈良国立文化財研究所によって制作された実測図を見ると、百山の上には大規模な削平地などの痕跡は見えない。また、この造営の記事が見えるのも、新御所（上御所）への移転の儀式である移徙の儀式が行われてから一月ほど後である。

④藤原定家の私歌集である『拾遺愚草』では、「みなせ殿の山のうへの御所」という名称でこの御所を記しており、「山上」に新たに作られたという御所は、当時「水無瀬殿山上御所」（水無瀬殿の山のうへの御所）という名称で呼ばれていたことがわかる。

⑤水無瀬殿という言葉は包括的な概念で、本御所、新御所、南御所などはその中に属するものであった。それぞれの御所は、正式には「水無瀬殿」の語を冠して「水無瀬殿〇〇御所」と称されていた。

→「水無瀬殿山上御所」もその名称から見て、水無瀬殿に含まれる御所の一つで、また建保五年に新たに造られたという意味では新御所の一つであるが、平地に造られ周囲を築垣で画された新御所である「上御所」とは別の御所であり、それとは別に「山上御所」と呼ばれたものものであったと考えられる。

⑥平成25年度（2014年度）に島本町教育委員会によって発掘調査が行われ（小字名に因んで西浦門前遺跡）、後鳥羽上皇の時期の庭園遺構が検出され水無瀬離宮に関連する遺構として発表された。

⑦藤原家隆の「水無瀬山　せきいれし滝の　秋の月　思い出ずるも　涙落ちけり」（『壬二集』）に詠まれた滝は、通常、水無瀬川左岸にある自然の滝である水無瀬滝のことで水無瀬山はその背後の天王山側の山であるとされる。しかし、この歌で詠まれる滝は人工的に堰入れて造られたものであり、『明月記』の記載からも、山上御所に造られた滝のことであると考える。

→西浦門前遺跡周辺を山上御所とみるならば、この歌に見える水無瀬山はその背後にある桜井の山並みであるということになるのではないかと考えられる。

⑧ なお、『明月記』に大石を運んで立てられたと記される滝は、2014年度の発掘調査で検出された小さな石組みではなく、これとは別に存在したものではないか。

⇒後世に破壊されていなければ、大石を組んだ滝の遺構やその痕跡が発掘調査で検出される可能性が考えられる。西浦門前遺跡から島本町役場のある鶴ヶ池にかけての地域は、滝組などを含めて重要な遺構の検出される可能性の考えられる場所である。後鳥羽上皇の御願寺である蓮華寿院の候補地は、島本町桜井の御所池周辺とともに、この鶴ヶ池周辺も有力候補地であると考える。

結びにかえて

後鳥羽院政期は日本史の大きなターニングポイントである。この後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）は、上皇が滞在中、日本の政治や文化の中心地であったと言っても過言ではない。

後鳥羽上皇の新御所（上御所）の文献史料から考えられる大まかな構造を、大正・昭和初期の地誌類、地域に残る伝承、江戸時代の絵図から推定される場所に落とし込むと、その場所は旧関西電力社宅となるのではないかと考えられる。それは論理的に考察した仮説ではあるが、今後、慎重で十分な調査が行われることを願うところである。

ただし、鎌倉時代の建築は、瓦葺きで大型の礎石を有する古代の宮殿・寺院や掘立柱の平安前期の建物と異なり、母屋や庇の建築が行われる際に、土壇の上に根石や小礎石が置かれてその上に建てられて濡れ縁の束を支える礎石も小さな石などであれば、農地、あるいは鉄道敷設などにともなう土砂や石の採取などのため削平されていた場合、遺構自体を検出することはかなり困難であろう。また、地覆と呼ばれるような横木を置いてその上に建物が建てられていた場合も、その痕跡の検出はかなり難しいだろう。

なお、旧関電社宅の場所は、空中写真などで戦後の変遷をたどってみると、社宅の建物の間の場所などは、それほど大きな改変などはなされていないようであり、良好な状態で遺構が検出される可能性も考えられる。

しかし、試掘等の調査で、現在の考古学の技術では明確な遺構が検出されなかったとしても、倉卒にこの場所を新御所（上御所）の遺跡ではないという判断がなされないように、当該地の慎重な扱いをお願いしたい。

〔参考文献〕 紙幅の関係で豊田の水無瀬離宮に関連する論文のみを掲載しました。

豊田裕章「後鳥羽上皇や有力廷臣などの武芸と馬場ー水無瀬離宮・上賀茂社を中心にー」，倉本一宏編『貴族とは何か、武士とは何か』，思文閣出版，京都市，2024 年，pp451-456

豊田裕章「日本中世初期の都市構造と気脈や地勢を重視する風水思想との関わりー平清盛の福原・源氏将軍の大倉御所・後鳥羽院の水無瀬離宮－」，吉村美香編『巫・占の異相　東アジアにおける巫・占術の多角的研究』，志学社，市川市，2023 年，pp177-210

豊田裕章「水無瀬殿（水無瀬離宮）と桜井地域における庭園遺構―離宮前後の桜井宮の問題を含めてー」，『日本庭園学会誌』35 号，日本庭園学会，東京都，2021 年，pp.19-43,英語訳 pp.19

豊田裕章「後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）の構造と選地設計思想について」，武田時昌編『天と地の科学　東と西の出会い』，臨川書店，京都市，2021 年，pp.349-395

豊田裕章「後鳥羽上皇の水無瀬殿における政務の裁定について」，『古代文化』第 71 巻第 4 号（通巻 619 号），古代学協会，京都市，2019 年，pp.79-90

豊田裕章「水無瀬離宮（水無瀬殿）の空間構成と機能について」,『京都女子大学宗教・文化研究所　研究紀要』第 32 号, 京都女子大学宗教・文化研究所, 京都市, 2019 年, pp.19-32

※「http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/2837/1/0160_032_002.pdf」で公開されています

豊田裕章「後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）の構造と選地設計思想について」, 武田時昌・麥文彪編『天と地の科学 East-west encounter in the science of heaven and earth』, 京都大学人文科学研究所, 京都市, 2019 年, pp.349-395

豊田裕章「水無瀬殿（水無瀬離宮）の都市史ならびに庭園史的意義」, 奈良文化財研究所編『研究論集 18　中世庭園の研究―鎌倉・室町時代』, 奈良文化財研究所, 奈良市, 2016 年, pp.14-37,英語訳 pp.216-217

豊田裕章「鎌倉時代における離宮および山荘と庭園」, 白幡洋三郎編『作庭記』と日本の庭』, 思文閣出版, 京都市, 2014 年, pp.277-306

豊田裕章「水無瀬殿の総合的研究」, 奈良文化財研究所文化遺産部編『鎌倉時代の庭園―京と東国―』, 奈良文化財研究所文化遺産部, 奈良市, 2012 年, pp.16-28

豊田裕章「復元水無瀬離宮―後鳥羽上皇の庭園都市」, 白幡洋三郎・錦仁・原田信男編『都市歴史博覧―都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ―』, 笠間書院, 東京都, 2011 年, pp.22-45

※　2024 年 2 月より、「水無瀬殿（水無瀬離宮）研究所」というホームページを開設しました。そのホームページには、元京都市考古資料館館長の長宗繁一氏が作成された GIS による「島本町埋蔵文化財発掘調査平面図集成」もあります。アドレスは「https://www.minase-institute.com」です。このホームページには、現在、準備中の部分もありますが、逐次更新していきたいと考えております。